

## 2020年度「自由を生き抜く実践知大賞」エントリー一覧 実践事例概要

NO	実践主体	実践事例名称	実践事例概要
1	理工学部電気電子工学科ナノ・マイクロシステム工学研究室	液体発光材料で切り開く革新的エレクトロニクス・健康医療診断技術	現在普及しているエレクトロニクス製品の多くは、固体状態の電子材料(主に半導体)が用いられているが、我々は液体発光材料を使った、新しい概念のデバイスの創生を目指し、活動している。実施期間中に小金井キャンパスに於いて、(1)有機物質の相互作用を利用した世界初の白色面発光源(Y. Koinuma, Sens. Actuators A, 306, 111966 (2020))、(2)様々な電子材料を融合し、ナノ・マイクロ加工技術によって創出した世界トップレベルの赤色液体発光デバイス(K. Okada, Appl. Phys. Express, 13, 107001 (2020))を実証し、液体材料の流動性や面発光特性を利用した新たなデバイス開発のための基盤技術を構築した。
2	キャリアデザイン学部 坂本旬ゼミ	MILIDティーチン 学生企画「コロナ禍時代に私たちができること」	法政大学、武蔵大学、同志社大学、新潟大学の学生がコロナ禍での活動についての発表を行ない、今できることはなにかをオンラインで話し合うティーチンを学生主体で実施した。他大学の学生のコロナ禍での活動を発表することで、そこで得た学びを共有することができた。加えて、各大学の学生から発表に対するコメントを貰うことで、新たな課題を見つけられた。特に武蔵大学の学生が指摘した「学生の主体性」、これはすべての学生に当てはまる大きな課題となるものだった。聴衆には、大学教授やTV局の関係者など50人以上参加し、ティーチン終了後には多くのフィードバックも頂いた。
3	オンライン教育支援団体「#おうち先生」	#おうち先生 -シン・こども居場所づくり-	全国の小学生を対象に「コロナ禍における不安やストレス解消のためのオンライン上の居場所づくり」を目指し、緊急事態宣言の翌日(4月8日)にスピード発足。休校期間から夏休み終了までの4ヶ月半、月曜から土曜まで、学生主体で毎日オンライン授業を配信した。授業実施数249回、総受講者数2005人を記録。対話重視でオンライン環境を全面的に活かした独自の授業デザインは、海外からも受講があるほど人気が高まり、さらに外国籍や不登校児・病弱児といったこどもへの配慮を考えるなど、多様なニーズにも対応した。コロナ禍の一時的な課題解決に並行し、未来を見据えた教育手法まで再現した取り組みは、NHKをはじめ各紙で特集を受け、「休校児童を支え合う新しい教育モデル」と報道された。
4	経済学部	OBOGから学ぶ自由を生き抜く実践知	実践事例概要: 経済学部100周年記念事業として、経済学部OBOGによるリレー講義を実施した。講師の選定は、卒業生とつながりが強いゼミの教員と、経済学部同窓会の協力を得て行い、金融から国際機関まで多種多様な業界で活躍する30代から80代の19名が登壇した。全12回の講義では、各業界の裏話や仕事に臨む姿勢・人生観など、幅広い話題を提供し、講義後は質疑を受け付けた。最終課題では学生自身のキャリア・ライフプランの執筆を課した。 成果: 履修登録者は340人である。コロナ禍により全編オンラインの開講となったが(学生の受講環境を考慮し、講師の了解が取れなかった回以外は録画の配信も行った)、毎回約200名の学生がリアルタイムに参加した。各回の事前質問は約150件、講義後の感想も毎回250件を超えた。講義後の質疑応答が1時間に及ぶ回もあったほか、学生が投稿した感想にも講師がフィードバックした(第11回の講義では214件の感想に全て返信頂いた)。その結果、学生とOBOGの間に新たなつながりが生まれたケースもあった。
5	法政大学生協同組合学生委員会	オンラインを活用した法政大学生協学生委員会による2020年度新学期活動	コロナウイルス感染拡大の影響で、対面での活動ではなくオンラインでの活動を行うことになりました。新入生は、この社会情勢の変化を受けて例年よりも大きく多様な不安や悩みを抱えていることが予想されました。実際に、SNS上でも心配な声が多く存在し、生協学生委員会として新入生の不安解消に非対面でも役に立てることはないかと話し合い様々な活動を行って来ました。2月下旬から4月末までは、大学生活をイメージしやすいように動画を作成し、履修登録や電子辞書の説明、学部学科の紹介などを行いました。それらを、TwitterやInstagram、生協HP上で拡散し、多くの新入生が見ることができるよう情報発信を行いました。そこから生まれる新入生の疑問等に応えられるようにLINEやTwitterなどのDMを用いて、なるべく同じ学部学科の先輩が相談に乗れる体制を整え、よりたくさんの不安解消ができるようにしました。5月頃からは、新入生同士のつながりを持ってもらうためにZoomを用いた顔合わせを行い新入生の友達作りを行いました。これらも結果、「不安がなくなった」「友達を作ることができた」といった喜びの声が多く寄せられました。
6	経営学部新入生サポーターおよびゼミチーム(学生スタッフ)	経営学部新入生ひろば	1. 目的 本年度入学した1年生は、教室での講義を受ける機会が無いまま、自宅等でオンライン授業を受講している。その結果、学生同士のつながりを見いだせないままに、一人で悩みを抱えるような状況が発生している。この状態を放置すると、学習意欲の低下、更には、学籍を持つことの意味の喪失による退学へとつながりかねない。そこで、交流機会の持てない新入生のためにZOOMミーティング「経営学部新入生ひろば」を設置し、その場で同級生や先輩学生(新入生サポーターや学生スタッフ)と交流を深める。 ※新入生ひろばを開催するゼミチームを「学生スタッフ」と呼称する。  2. 実施方法 (1)常駐の新入生サポーター1名を全体のファシリテーターとして配置。 (2)新入生は登録制で任意参加。 (3)プログラム開催時の学生スタッフ2~5人(1名は不可) (4)学生スタッフは1回(60分)1,130円が大学から支払われる (5)学生スタッフは事前に開催時間帯・タイトル・概要を申請する。(申請フォーム入力) (6)開催時間帯の重複が発生した場合は要調整  3. 「新入生ひろば」で新入生サポーターおよび学生スタッフが行う業務 (1)交流のファシリテーション (2)ゼミ生が考えるオリジナルグループワークの実施 (3)ビブリオバトルなどゲームイベントの開催 (4)その他学生が考えるオリジナルプログラム  4. その他 ZOOMミーティングの設定や、申込み・問い合わせ対応は学部事務で行う。  5. 開催日時 2020年6月1日~30日の月~金(22日間) 12:30~16:30  【成果】(詳細は添付資料を確認のこと) 新入生参加者 延べ 26名 新入生登録者 延べ 36名 新入生サポーター参加者 延べ 91名 学生スタッフ参加者 延べ 51名
7	現代福祉学部 佐野ゼミ	COVID-19: 歌と共に未来を創る希望と絆を ~日越交流~	ソーシャルディスタンスや外出自粛... 当たり前だった生活が突然変わりました。今までのように人と会うことが難しくなったとき、コロナ禍の一番大きな課題だと感じたのが「孤独」です。それと同時に「人とのつながり」の大切さを身にしみ感じ、私たちは、動画製作を始めました。国境を越え連携してつくるこの動画は、離れていてもつながっていること、決して独りではないことを表現しています。メンバーの中の1人は、コロナの影響を受けまだキャンパスで授業を受けたことのない大学1年生ということで、大学生目線の「人とのつながりの大切さ」も伝えたいと思っています。また、留学中のメンバーが、国境の架け橋となって、日越交流をしながら制作しました。This is me の楽曲に合わせ、年齢、性別、障害、人種、民族、出自、宗教、経済的地位の壁を越え、それぞれがダンスや歌、楽器で、個性を生かした表現をしています。未だ収束せずこの先どうなるか分からない状況で、見えないウイルスと世界が戦っている今は、全世界の人々が同じベクトルを持ち、世界をもっと良くするチャンスカもしれません。この動画を発信することで見ている人がSDGsの目標である、「人や国の不平等をなくす」ことへ関心をもち、考えるきっかけを提供したいです。動画制作の中で、アイデンティティを受け入れること、価値を認め合い居場所をつくる努力をすることで、尊厳を尊重することを学び「誰一人取り残さない社会」を現実にする第一歩を踏み出したいと思っています。

8	小金井事務部学務課	小金井WEBオープンキャンパス	<p><b>【概要】</b>  1. 日時  (1)リアルタイム企画  a. 日 程 2020年8月22日(土)10:20~16:30  b. 配信場所 小金井キャンパス 西館  (2)オンデマンド企画  8月20日(木)より小金井WEBオープンキャンパスホームページ上にて公開  【URL】https://nyushi.hosei.ac.jp/koganei-oc</p> <p>2. 説明  例年、対面形式で開催しているオープンキャンパスをオンライン上で開催した。受験生・保護者に対し、対面時と同水準もしくはそれ以上の情報提供を目指し、教職学一体となって企画を実行した。企画はリアルタイムとオンデマンドを併用した。リアルタイム企画では「cluster」※1を利用し、小金井キャンパスの施設見学や教員・学生による学部説明会、研究室紹介を開催した。そのほか、「YouTube Live」を利用した入試制度説明会、「Zoom」を利用した学生による個別相談会を開催した。オンデマンド企画では教員による学部紹介、研究室紹介、模擬授業および学生による学部紹介動画を制作し、HP上に掲載した。合わせて5つのリアルタイム企画、38のオンデマンドコンテンツを実施することができた。</p> <p><b>【成果①】</b>  8月22日(土)に実施したリアルタイム企画の延べ参加者が約1200名、オンデマンド企画については全動画の総視聴回数が約5000回※2となっており、現在も視聴数は伸び続けている。また、対面では参加が難しかった遠方に住む受験生にも情報提供の機会をつくることができた。</p> <p><b>【成果②】</b>  上述の「cluster」による小金井バーチャルキャンパスは、情報科学部小池教授と同氏研究室の学生が3Dモデリング技術を駆使して、再現度の高いバーチャル空間を制作した。このような企画を通して、理系キャンパスの学びを広報することができた。</p> <p><b>【成果③】</b>  オンラインで実施できる企画を学生スタッフが検討し、実行した。コロナ禍においても、学生同士がさまざまなツールを用いて、コミュニケーションを図り、ピアサポートを体現した。  ※1 スマートフォンやPC、VR機器など様々な環境からバーチャル空間に集って遊ぶことができるSNS  ※2 2020年10月1日現在</p>
9	法政大学国際高等学校 生徒個人	コロナ禍での成長と全国の高校生への影響	<p>私は、法政大学国際高等学校の教育方針が自由を生き抜く実践知に基づいており、生徒が自由に成長できる環境であったため、コロナ禍においても成長することができたと思います。</p> <p>私はコロナウイルスによって、アメリカ長期留学が中断されました。しかしこのピンチをなんとかしてチャンスに変えようと思い、自粛期間中にできるだけ多くのオンラインイベントに参加することを決めました。</p> <p>4/27に最初のイベントに参加して以来、約3ヶ月間で、40のオンラインイベント・オンラインセミナーに参加し、約900人の中高大学生と交流しました。この交流からコロナ禍の中で同世代が何を思っているのか、どのような影響があったのかなどの本音を聞くことができました。それらを参考にし、2つのイベントの主催、3つのイベントの運営を携わることができました。</p> <p>私の実践事例は、8月30日に開催した「全国オンライン青春祭」です。これは、学校行事が無くなり、青春を失ってしまった中学生や高校生がオンラインで文化祭を作り上げるというイベントでした。まず、当日までに青春を感じられる写真や動画をソーシャルメディアに投稿してもらい参加者を募りました。当日の内容は、文化祭のようにみんなで協力するゲームを行ったり、投稿された写真や動画を共有したりしました。このイベントの開催で、参加者が全国の高校生と交流することができ、青春を感じられる場所を作ることができました。このイベントを開いたことで参加者のコミュニティを上げ、全く新しい青春を過ごすことができたと思います。このイベントの運営で、特に私はTwitterでの宣伝や投稿の募集、当日のゲームや司会進行役を尽力しました。私は、このイベントの運営経験から、グループでの協調性、企画力、リーダーシップ力を身に付けることができました。</p> <p>全国の高校生と交流して私が気づいたことは、コロナ禍でも自主的に行動している高校生はとても輝いており、その可能性は無敵大であるということです。私たちはコロナ感染対策によって登校できませんでしたが、その分自由な時間をやりたいことに費やしていました。それはオンラインイベント開催や、視野を広げるためのセミナーなど様々で、制限されている中でもさまざまな活動を行っていました。このことから私は、自由な時間を得たことによって人は成長するチャンスを広げられることに気づきました。</p> <p>私はコロナ禍において、消極的にならず、自由な時間を自主的に行動する力に変えることができました。この経験から、全国の高校生にもその力をつけて欲しいと思いました。そして、それを促進するために積極的に高校生にイベントの参加を呼び掛け、高校生が簡単にアクションを起こせるような手助けをしたいです。</p> <p>また、自主的に行動する以外にも、学校以外のコミュニティを作り、同世代間で刺激し合うことは生徒自身の成長につながります。私は自ら新しい世界に飛び込んでいきたいと思うようなコミュニティを作っていきたいと思っています。</p>
10	スポーツ健康学部 学生個人	コロナ禍での取り組み	<p>私達は国際問題を主として話し合いをしています。今までの話し合いの中で人種問題に焦点を当てた取り組みをまとめたもののパワーポイントを掲載させて頂きます。話し合いをするなかで、私達は人種問題の歴史を各自勉強し自分たちなりに原因を考え、私達が出来る解決策を考えました。</p> <p>具体的には、先ず自分たちが興味のある国を調査しプレゼンテーションを実施しました。その中でオーストラリア・日本での発表者が各国の民族や先住民に興味を持ちました。オーストラリアのアボリジナル・ピープル、日本の琉球民族・アイヌ民族はどの民族や先住民も、力の大きい勢力により生活を奪われてしまった過去がありました。私自身各国のプレゼンテーションを聞いて、高校までに習った内容だから復習になる程度に思っていたのですが、実際聞いてみると高校の時受験の為にひたすら暗記をしていたからか、人種問題に関して印象的なイメージはあまりなかったのですが、今はこんなにも悲しい過去があったのかと感情的になる自分がいて、歴史を見つめ直す新たなきっかけとなりました。例えば、オーストラリアでは先住民であるアボリジナル・ピープルは遊牧生活をする狩猟民族であり、町や村は一切なく定住していなかった為に、イギリス人が植民を始めたときに、まだ誰もこの土地を所有していないと認識され植民されたと言われていたそうです。また、オーストラリア大陸はイギリス人の流刑地として利用され、罪を犯した人や素行の悪い人が送られる場所とされていました。恐ろしいことに先住民をハンティングすることが流行っていたようです。このことに加えて、イギリス人が持ち込んだ主に天然痘ウイルスにより、彼らの人口が減少してしまったそうです。さらに、同化政策により子供を親から引き離し、白人社会で英語を教え込まれ、労働力にされていたために彼らの言語をはじめとする文化の消失があったそうです。オーストラリアや他の国についてのプレゼンテーションから、私達はアボリジナル・ピープル、アイヌ民族、琉球民族をはじめ世界各国の少数民族のグループでは、奪われ方は違っても、文化や人数は減少してしまった過去があることを知って、各自思うところがありました。大きな勢力に植民されたけれど今も文化が残っているのは凄いと感じる人もいれば、もっと民族について調べたいと感じる人など様々でした。そしてどの国にも人種問題は存在していて、私達も考えなければいけない問題であるという結論に至りました。自分自身は今まで人種問題を身近に感じたことがありませんでしたが、これを機に少しではありますが、この問題に触れて人種問題の難しさを感じました。自分が差別を受けたことがないから、差別を受けた(ている)方々の気持ちも全て理解することはできないし、理解している気持ちになって浅はかな共感をしてはいけないと感じるし、だからといって、関心を示さないことは良くないとも感じました。</p> <p>そんな中でコロナ禍にアメリカではジョージ・フロイド氏の殺害という事件がありました。そこで、私達はこの黒人問題に焦点を当てて話し合いを始めました。人種問題を考える際、#black lives matterという言葉がテーマとして議論しました。この言葉のきっかけとなったのは2012年2月トレイボン・マーティン氏が人違いで射殺されてしまったという事件です。事件後、白人警察は無罪となり、それに疑問を持ったアリシア・ガルザさんはSNSで”Black people. I love you. I love us. Our lives matter, Black lives matter”というメッセージを発信したことが始まりです。その後Black lives matter運動としてアメリカ国内外へと拡大していきました。そこで、そもそも人種問題の原因は何かを考えてみると、民族・歴史・社会的地位・認識・所得・環境など様々な違いが挙げられるのではないかと意見が出ました。アメリカにおける黒人差別の歴史をたどるとオーストラリアと同じように、ヨーロッパからの移民が先住民であるインディアンの土地を奪い、拳銃の果てには奴隷として扱っていたという悲しい事実があります。またアフリカ大陸やカリブ諸島から拉致された人々も同様に白人の奴隷としてひどい扱いを受けていたようです。黒人である奴隷が死んでしまっても経済的な損失としか考えられないような状況だったようです。そんな奴隷制度は南北戦争の最中リンカーン大統領が奴隷解放宣言をし、廃止されました。しかしながら、法的に宣言がなされただけで差別は依然として今日まであります。当時黒人にはお金はなく、生活するためには借金するしかなく、負債は肉体労働で返済しなくてはならないという状況であった為貧困、社会的地位の差は更に広がってしまったと言えると思います。また、奴隷解放宣言後それ以前と比較すると、黒人は暮らしやすくなったのかもしれませんが、例えば投票権がなかった、黒人は白人に対して会話をする時は必ず帽子を取らなければならなかった、「ミスター」「ミセス」を付けて呼ばなければいけなかったといった小さな暗黙の了解が、認識の差を根付かせてしまったように感じます。今回の事件を始め、黒人が差別されるような出来事において黒人は抗議デモをしています。平和的と言われている行進をする人もいれば中には高級ブランド店に押し入って強盗をするというデモもありました。抗議デモのやり方を知って白人の差別だけが悪いのか、黒人も意見を主張する方法を間違えればそれはよくないことなのではないのかという意見や、白人が悪い・黒人が悪いという見方で捉えているのではなくて一人ひとりの人間としてとらえないといけないのかという考え、黒人は白人に反発するためにはデモという行動しかなかったのではないのかという意見などが出ました。デモを実施している人々の一人ひとりの詳しい気持ちは分かりませんが、黒人の人は差別を受けている現状それをどうにかしたいという気持ちが根底にあるように感じました。私達ができる解決策として考えたのは、一つ目に黒人だから白人だからと人種で人を判断するのではなく、差別や偏見の目を持たずに人種問題について考えていくことです。二つ目に歴史を学ぶ(学ば直す)ということです。私達は専門家ではないし、少し調べたくらいでは意見を主張してはいけないのかもしれませんが、人種問題の原因・背景を考えてみないと、ジョージ・フロイド氏の事件のような殺害事件が何故起きているのかも分からずに聞き流すことになってしまいます。三つ目は自分なりに考えた自分の意見を発信するという事です。Black lives matterの発信源はTwitterであり、一人のつぶやきが今は黒人の抗議デモを象徴する言葉になっています。私達はまだ学生であるから何もできないのではなくて、自分達の意見を発信することで、それは時にとても大きな力になると思います。そして、最後に妥協をしないということです。これは、とても壮大な話で私達だけではとてもできることではないのですが、教育を変えるということです。5月31日DJ Kam BennettさんがTwitterで掲載した白人の子供と黒人の子供が抱き合うという動画を載せました。これを見て私達は、幼少期に差別を感じてしまったから、のちに偏見の目を持ってしまわないか、もし黒人白人の歴史をしっかりと教えたらうで、親や教師を始め今差別は許されないと教育ができればゆくゆくは差別がなくなるのではないかと結論に至りました。</p>

11	キャリアセンター	<p>コロナ禍においても法政大学の強みのひとつと言えるキャリア・就職支援を止めることはできない。その強い決意のもと、キャリアセンターでは3キャンパスのスタッフが一丸となって例年と変わらないキャリア・就職支援を構築すべく工夫を重ねている。年間約2万2000件の要望がある個別相談は対面だけでなくZOOMを使ったWEB相談、電話、メール等でも対応。学生はキャンパスを問わず相談が可能な体制となっている。</p> <p>就職支援行事としては、就職活動やインターンシップへの理解を促すガイダンスや対策講座は動画を作成・配信し、学生が好きな時間に視聴できる環境を整えた。学内企業説明会はオンラインで7・8・9月と連続して開催し、法政大学生を採用したいという優良企業と出会う機会を提供した。また、少人数制で企業の人事担当者のもと学内でインターンシップ体験ができる「インターンシップ体験会」は本学独自の人気企画であり、今年もオンラインで実施するとともに今年度は新たに社会人と近い距離で仕事の話が聞けるイベントとして「社員座談会」も新規に企画している。企業の事業内容だけでなく、実際に担当する業務を具体的にイメージして入社後のミスマッチを減らし、納得のいく進路を主体的に選ぶことができるよう様々な機会を提供している。</p> <p>本学のような大規模な総合大学であっても、少人数制の濃い学びができるイベントに重点を置き、開催してきた。これまでは対面での支援を重視してきたが、コロナ禍をきっかけにオンラインでの実施に切り替えた。それによって大人数が対象のイベントも、チャット等のオンラインツールにより質疑応答が活発になる等対面以上の効果をもたらすことができた。</p> <p>今後も引き続き、自分を知り、業界・企業を理解するための様々なイベントを通じて学生一人一人が能力や適性、希望に応じたキャリアを実現できるよう全力を尽くしていく。</p>
12	学務部学務課	<p>コロナ禍によりキャンパスへの学生の入構が制限され、ガイダンスや窓口相談の対面での実施が困難となりました。本取り組みはこのような緊急事態下にあつて、オンラインを中心としながらも、学生に対して必要な情報を提供し、新年度の準備をスムーズに進めることのでき、なおかつ特に新入生に対しては学生生活の不安を解消するような学生サービスの環境を整えるため、学務事務課の中堅、若手職員が中心となって問題点を共有しながら、ワンチームとなって課題解決に取り組んだ実践例です。</p> <p>①コロナウイルス特設ページおよび新入生特設ページの作成 ⇒大学に来ることが出来ない学生(特に新入生)が新年度の準備に困らないよう、特設ページを作成し情報の一元化および新年度準備の手順を公開しました。</p> <p>②オンラインでのガイダンス実施 ⇒対面ガイダンスを実施できない中、動画やパワーポイントに要点をまとめてガイダンス資料をWEB上で公開した。閲覧すれば体系的に理解できるように、各学部担当者が丁寧かつ知恵を出し合い、工夫して資料作成を行いました。</p> <p>③来校に不安がある学生のための問い合わせフォームの作成 ⇒キャンパスに入構できない時期に、Googleフォームで問い合わせ窓口を開設し、メールでなるべく早く回答する仕組みを整えました。また、問い合わせを記録し、可視化することにより、以下の利点がありました。 ・よくある質問を取りまとめて学生に公開することで、同様の疑問を持つ学生の不安や不便を解消するとともに、問合せ対応の効率化ができました。 ・オンラインのシステムであるため、テレワーク中でも十分対応可能なサービスとなりました。 ・学生への回答が可視化され、複数人が認識・確認できたことにより、回答の精度を上げることができました。</p> <p>④自宅の通信環境に不安がある学生向けに、感染防止対策を施した自習教室の準備 ⇒席間ビニールシートや来室者記録簿を設置し、感染防止に配慮した自習教室を準備しました。</p>
13	経済学部 ジュリア・ユングゼミ	<p>コロナ禍における新しいゼミの形態：バーチャル・ワールドワーク</p> <p>下記添付資料参照 <a href="http://phronesis.hosei.ac.jp/application/files/3316/0577/7696/04.pdf">http://phronesis.hosei.ac.jp/application/files/3316/0577/7696/04.pdf</a></p>
14	学務部教育支援課(学習ステーション)	<p>コロナに負けるな！大学に来られない今だからできるピアサポート活動(学習ステーション) ～学生スタッフを活用したオンライン学習サポート・プログラムの実施～</p> <p>①オンライン新入生サポート ②オンライン学生企画型プログラム ③オンラインLステゼミ ④新入生向けオンライン講演会</p> <p>①毎年4月に専用ブースを出して実施している新入生サポートですが、今年は新入生の入構が制限されていたため、ZOOMを活用してオンラインによる新入生サポート活動を実施しました。既に昨年度中に応募していた新入生サポーター(学生スタッフ)21人と学習ステーションの担当者が、オンラインで打合せを行い周知方法や開催方法について検討しながら実施し、最終的には新入生延べ90人が参加しました。新入生からは履修登録の方法や空きコマの過ごし方、時間割の組み方、サークル活動など、大学での学習や学生生活に関する様々な質問が寄せられ、それらに学生スタッフが丁寧に対応し、好評のうちに終了しました。オンラインでのプログラム実施は、学生はもちろんスタッフにとっても初めて試みであり、試行錯誤しながらの実施でした。想定以上の参加者があり好評だった反面、オンラインならではの課題も見つかり、次年度の実施に向けてさらなる改善が期待されます。</p> <p>②学生企画型プログラムは通常は対面かつ参加型として実施されますが、コロナ禍の今回はZOOMを活用したオンライン型プログラムとして開催しました。参加人数は毎回少人数であるものの、その分学生スタッフと参加者が親密に交流することができ、参加者の満足度は高いものでした。コロナ禍の今だからできるピアサポート活動をやろうという呼びかけに応えてくれた学生スタッフにとっても、初めてのことで課題はありましたが、自らの企画で参加者と交流できた点は手ごたえを感じたのではないかと思います。 「コロナで旅行に行けないこの時期にこそバーチャルツアーしませんか？」毎週1回全4回(各回10名程度) 「at home おうち時間で一緒に就活を語ろう！」毎週1回全4回(各回10名程度)</p> <p>③ZOOMを活用したLステオンラインゼミを開催しました。今回の特徴は通常のLステゼミのテーマ設定ではなく、コロナ禍で大学に入構できない学生や新入生に対して、日々不便さや不安を感じている題材にテーマを絞って開催したことです。結果的に以下の通り多くの学生に参加していただきました。 「レポートの“基本の基本”を学ぼう！」多田和美先生(社会学部 准教授)参加学生150名 「大学図書館を有効活用！～レポート・論文資料の探し方～」有川博隆氏(図書館事務部)参加学生53名</p> <p>④正課外のPBLとして例年4月に実施している新入生対象講演会について、4月の開催は残念ながら中止したものの、秋学期開始前にYouTubeLive配信を活用してオンラインによる講演会を実施しました。春に実施を計画していた学生スタッフのうち6名とプロジェクトに興味を持った新入生4名が名乗りを上げ、新入生を元気づける内容のプログラムを企画しました。講師への依頼や、イベントの告知、当日の運営等、ほぼ100%の準備を10名の学生スタッフが担当しました。新入生や保護者から大きな反応が寄せられました。 【新入生向けオンライン講演会】「尾木ママと考える！～大学生活のリスタート」 尾木直樹先生(教育評論家・法政大学名誉教授)参加申込 新入生274名 新入生保護者103名(合計再生回数:479回)</p>
15	市ヶ谷図書館 ライブラリーサポーター 多摩図書館 ライブラリーサポーター 小金井図書館 ライブラリーサポーター	<p>ライブラリーサポーター(通称:ライサポ)は、各キャンパスの図書館でそれぞれ活動している学生団体。学生にとって魅力的な図書館づくりをモットーに、職員の方々と協働しながら様々な活動をしている。例年行っている活動をオンラインで行うだけでなく、より積極的に「いま自分たちにできること」を模索して取り組んだ。</p> <p>・市ヶ谷図書館だより(臨時増刊号) これまで職員の方が発行してきた図書館だよりを、ライサポが作成。臨時増刊号で発行した。フリーペーパーとして配ることが困難な状況だったため、市ヶ谷図書館のTwitterやホームページにPDF形式で掲載。ライサポの活動紹介や書評などを掲載した。その他にも、三題断と呼ばれる、元来落語の大喜利の一種で、適当に選んだ言葉(題目)3つを織り込んだストーリーを紡ぐ手法にも挑戦。3つの言葉を題材にした短編小説をライサポの学生が執筆し、掲載した。 ・140文字の本紹介 大学図書館のTwitterを活用し、ライサポによる書評を投稿した。実施期間は5月下旬から7月上旬。紹介した本について、大学図書館の電子書籍サービスである、Maruzen eBook LibraryやKinoDenのリンク、青空文庫(著作権が消滅した作品や著者が許諾した作品のテキストを公開しているインターネット上の電子図書館)のリンクを張り付けた。オンラインに蔵書があればすぐに読むことできるように、また詳しい内容を調べられる工夫をした。</p> <p>・オンライン選書ツアー 例年は書店を訪問し、選書を行っている。今回は、オンライン上で学外からでも読むことができる電子ブック「KinoDen」、「Maruzen eBook Library」に収録されているタイトルから選書を行った。「同じ学生みなさんに読んでほしい！図書館にこんな本があったらいい！」という基準で選書をした。選書後にはオンラインで懇談会を開催し、ライサポ内で選書した本を紹介し合った。コロナ禍でも読書をする環境づくりに貢献することができた。</p> <p>・オンラインビブリオバトル 8月3日と9月23日、Zoomを用いて、オンライン上で開催。参加者は、発表者(バトラー)が3名、観戦者20名が集まり盛況だった。オンラインの特徴として、キャンパスが異なっても気軽に参加しやすいという点が挙げられた。 「ビブリオバトル」とは、発表者(バトラー)が5分間の書籍プレゼンテーションをして、それぞれの発表終了後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を行うゲーム。最多票を集めたものを「チャンプ本」として決定する。 開催後のアンケートでは、「新しい本に出会うきっかけになる」「オンライン上ならではの面白さを感じられた」といった声が寄せられ、回答者全員から、またオンラインビブリオバトルに参加したいとの高評価を得ることができた。</p> <p>・オンライン読書会 10月21日にライサポ主催のオンライン読書会を開催予定。大学図書館主催のオンライン読書会から着想を得た。オンライン読書会は、コロナ禍に学生のつながりをつくる場として役割を担っている。9月に開催された大学図書館のオンライン読書会に、ライサポに所属する1年生も参加した。Zoomを通じて、9月以降の学生生活で読みたい本を参加者同士で紹介し合った。参加者は、学部も学年も異なる7名。羽田圭介の『スクラップ・アンド・ビルド』を紹介され、尊厳死の存在を初めて知るなど、自分の知らない分野について学べたという。「初めて大学生として生活しているという実感を持たせたい」と話していた。 大学図書館主催ではなく、学生が読書会を開催することで、よりリラックスした状態で参加してもらえるのではないかと考えている。また、テーマも『食べ物』が題材の本と設定。より気軽に参加してほしいという意図を持っている。</p> <p>オンラインビブリオバトルやオンライン読書会、オンライン選書ツアーのイベントでは、準備や当日を通じて、キャンパスの垣根を越えて活動してきた。コロナ禍でつながりが絶たれたのではなく、オンラインのツールを用いて、より協力した活動をするのができたと考えている。</p>

16	GIS (グローバル教養学部)	GIS Summer Talk Program	<p>春学期は授業が全てオンラインになったことから、授業以外でも友人や先生と自由に英語で話し合う機会が欲しいという声からあがった。そこで夏休み期間を利用して、GIS生・教員・卒業生がオンラインで自由に集い、個人的な会話ができる交流の場を設けた。任意の日時に有志が好きなトピックについてオンラインでプレゼンテーションを行い、その場で様々な意見交換をした。趣味の相撲観戦の話や研究者の道を選んだ経緯を話す教員もいれば、国内外の大学院で学んでいる卒業生やJICAで働く卒業生をインタビューするGIS生もいた。教員7名、卒業生8名を含め、多くのGIS生が英語での交流会に参加した。3週間の期間で計14回開催し、参加者からは春休みにも継続を希望する声があった。</p>
17	応援団チアリーディング部	史上初の挑戦！オンライン大会金賞！	<p>新型コロナウイルスの猛威は、弊部の活動にも大きく影響を与えていた。応援活動をはじめ、対面練習も自粛する事になり、日々団活動に打ち込んでいた私達は、目の前の目標や未来を失ってしまっていた。コロナ禍の影響で、チアリーディングの競技大会も中止となる中、チアリーディングの指導・育成団体である、USA Japanより2020 USA Cheerleading&amp;Dance Virtual Team Contestが開催される事が決定した。例年のスタンツを用いた演技で競い合うのではなく、チアダンスを踊っている姿を撮影し、その動画を採点し表彰されるという大会である。</p> <p>弊部では、コロナ禍に向き合い、今まで行った事がなかったオンライン練習を5月から実施していた。そしてzoomの様々な機能を用いて、新しい練習様式を確立してきていた。この大会への応募は、例年の活動が全くできない中、日頃の成果を発揮する貴重な機会であった為、出場を決意した。大会には、『RISERS』と『BLAZE』の2チームに分かれて出場し、チーム名もミーティングを行い、全員で想いを込めて作成した。『RISERS』は、今年のスローガンであるRISEに込めた意味を達成する事が今の私たちのすべき事と考え作成した。一方、炎と切り開くという意味を持つ『BLAZE』には、新しい活動方法を切り開き、炎のように熱く、輝けるようにという意味を込めた。</p> <p>開催発表から応募期限まで与えられた時間はたったの1ヶ月であった。撮影日当日までオンラインで練習をし、当日の1時間のみで撮影を行う事は、史上初の挑戦だった。</p> <p>この1ヶ月間、週5回のオンライン練習を重ね、ダンスの振りや全員で合わせたり、踊っている動画を自身で撮影し、それに対し学年関係なくアドバイスをし合ったり、チーム全員が目標を持ち、金賞に向けて個々にできる事を努めた。</p> <p>撮影日当日は、日本のチアリーディング協会の感染症対策のガイドラインに従い、短時間での撮影を行った。今までのオンライン練習の成果を発揮し、全員が納得いく演技を動画に収めることが出来た。</p> <p>結果は、RISERSは金賞、BLAZEは銀賞を受賞する事が出来た。審査員の方に「ダンスが揃っており、最後まで笑顔で、チームワークを感じた。」というお言葉を頂けた。</p> <p>前代未聞の挑戦だったが、全員が決して諦める事なく、前に向かって一歩ずつ進み続け、切り開いた結果だと考える。私達は、コロナ禍における課題を新たな希望に変える事が出来た。オンライン練習を重ね、直接会えなくとも、画面上の仲間の顔を見るだけで自然と笑顔になり、独りではなく、チームで共に前に進んでいる事を実感した。この活動を通して、出来なくなってしまった事を考えるのではなく、この状況下でも、「出来る事」を考え続ける事こそが、コロナ禍を生き抜く上で重要だと身をもって学んだ。</p>
18	法政大学第二中・高等学校／法政大学学生専用寮運営企業(共立メンテナンス)	自由を生き抜く実践知ゼミラボ H2 BLSE in 法政大学学生専用寮	<p>本実践は、法政二中高の教育の重要課題と捉える心身の健康、生命の大切さを柱とし、長きにわたり取り組んできた健康安全教育「H2 BLSE」と昨年度『自由を生き抜く実践知大賞』にて同じくノミネートされた法大専用寮運営企業「共立メンテナンス」代表者との情報交換の場の出会いから産まれた、互いのアイデアの結集によるものです。二中高「H2 BLSE」が法大生専用寮の寮生の健康・安全な質の高い寮生活の維持に有益となるための発案として以下のような実践を計画・立案しました。付属校における実践が、学校という枠組みを越え、学生生活の健康管理面の一助となることに寄与できる可能性を期待し、今年度は第1歩として、以下の内容を試みました。</p> <p>実践内容: RA(レジデントアシスタント=寮生代表学生)および寮長・寮母さんへの以下テーマのリモートによる「健康安全衛生研修会」を実践。その際には、「コロナ禍における心のケア」の観点で、市ヶ谷学生相談室スタッフおよび主任カウンセラーと協議し、助言をいただいた。また、今後は各キャンパスの主任カウンセラーによる「心のケア・心理的サポートの実践」などの寮生向けのリモート研修会を計画中です。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)感染症予防対策</li> <li>2. 「Withコロナ」時代における冬季における第三波を安全に乗り切るための心身共に健康な寮生活の備え。</li> <li>3. いざという時の応急手当の方法とBLS＝一次救命処置のスキルの理解。</li> <li>4. 法大学生相談室の案内</li> <li>5. その他の活動実践と今後の課題</li> </ol> <ul style="list-style-type: none"> <li>・寮内の掲示物(成果物)などの作成と新しい生活様式による感染症対策啓発活動</li> <li>・上記リモート研修会の内容を動画コンテンツとして提供し、寮生同士のSNSなどによる繋がりを利用した配信</li> <li>・寮生のみならず、多くの学生が抱えている可能性のあるオンライン授業など、コロナ禍の精神的負担を寮生活における相互の関係性構築で良好な状態にできるよう、学び合いの場などの提案</li> </ul> <p>以上の取り組みを様々な形で、継続的に寮生が共有し、有効活用することができるようチーム法政として寄与することを目的としたものです。</p>
19	Sustainable for TAMA	社会課題解決のためのSDGsイベント開催	<p>下記添付資料参照  <a href="http://phronesis.hosei.ac.jp/application/files/8716/0577/7677/03.pdf">http://phronesis.hosei.ac.jp/application/files/8716/0577/7677/03.pdf</a></p>
20	政策創造研究科 石山研究室	社会人大学院生のリカレント教育の実践における地域へのフィールドワーク研究活動とその出版	<p>社会人大学院生である各執筆者は研究者であるとともに、市井の人として地域の地道な活動に参加し、書籍という形で研究成果を地域への還元を目指している。</p> <p>政策創造研究科は、主に社会人を中心としたリカレント教育を実践して、かつ修士論文、博士論文の提出を目指す大学院である。私たちが所属する石山研究室では、雇用・人材育成・キャリアを中心に主体的に院生が研究を行っている。その中で、人材育成・キャリアをテーマに、地域でフィールドワークを中心とした研究を行う院生が複数名おり、その研究の切り口が「関係人口」と「サードプレイス」でまとまってきた。</p> <p>そこで、院生が主体的に打ち合わせを繰り返し、地域における関係人口とサードプレイスをテーマとして、書籍を出版することとした。その出版では、院生が当書籍の編集者をつとめた。2019年10月に出版すると、大きな反響を呼び、現在4版(累計6000部)まで重版し、多くの書評が掲載され、全国各地で出版記念講演会も行われ、まさに研究と実践を架橋する実践知の事例となった。</p> <p>なお、院生の研究は、修士論文、国際学会での発表、地域活性学会での発表、地域活性学会の論文としてもまとめられている。</p>
21	保健体育センター	大学スポーツアドバイザー主導による体育会学生のキャリア形成支援体制の構築(スポーツ庁大学スポーツ振興の推進事業)	<p>本事例では、大きく4パートに分ける形で体育会学生の多角的なキャリア支援を検討・実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 体育会学生の学業および卒業後の進路に関する実態調査  ⇒在学中に体育会に所属していた学生たちの学業成績と、卒業後の進路に関する要因との関連を明らかにした。その結果、取り組んでいる競技や出身高校など、体育会学生をより詳細に分類して、注目する必要性が示された。</li> <li>② 卒業生の知識能力・精神的健康度・ワーク・エンゲイジメントに関する比較分析  ⇒体育会に所属していた者だけでなく、広く卒業生に実施したアンケート調査して、大学時代と卒業後に得た知識や能力や、精神的健康度・ワーク・エンゲイジメントを体育会と非体育会で比較分析した。1,000名を超える卒業生のデータを分析した結果、大学時代に体育会に属していた勤労者の精神的要素が良好であることを日本で初めて実証的に明示することができた。</li> <li>③ 体育会初年次学生のスポーツ・ライフ・バランス実態調査・分析  ⇒体育会の1年生を対象として、スポーツ・ライフ・バランス(スポーツとそれ以外の生活とのバランス)やその関連要因(メンターの有無等)について調査を行い、その実態を把握した。その結果、家族や所属する部の関係者以外の人的資源を充実させる必要があると考えられた。</li> <li>④ 体育会学生のキャリア教育・修学支援施策の実施と先進事例からの学び  ⇒キャリア教育・修学支援施策の実施および、先進大学の事例から、体育会学生のキャリア形成を促進するために有用な学びや研修のあり方を調査した。とくに、調査結果に基づいてスポーツ・ライフ・バランスのゲームを開発し、体育会に所属する2年生約300名を対象に実践したことは、特筆に値すると思われる。</li> </ol> <p>本事例で得られた知見は大きく、今後の保健体育センターの体育会学生への研修方針の策定に大きく資しており、事業内で実施した研修施策の継続実施についても既に決定している。</p>

22	多摩オープンキャンパスリーダーズ	多摩Webオープンキャンパスでの取り組み	<p>コロナ禍で対面のオープンキャンパスが中止になる状況下で、受験生に対してオンラインで実施可能な支援を学生スタッフである多摩オープンキャンパスリーダーズ(以下、リーダーズ)が検討し、実行した。</p> <p>具体的な活動としては①多摩Webオープンキャンパスホームページを設立、②Web個別相談、③学生のオンライン座談会「法政トーク」、④キャンパス紹介動画の撮影等が挙げられる。</p> <p>①多摩Webオープンキャンパスホームページでは、学生が制作したコンテンツ(動画や写真、手作りポスター等)を通じ、多摩キャンパスでの学生生活を受験生に発信している。</p> <p>②8月に実施したWeb個別相談では、リーダーズが事前講習において2021年度入試概況を学び、約40名の受験生に対してZoomを利用した相談に応じた。本企画は好評のため、11月28日(土)に第2弾を実施する。</p> <p>③「法政トーク」は月1回配信しており、YouTube LIVEのコメント機能で受験生から寄せられた質問について、各学部のリーダーズ学生が配信中にリアルタイムで回答する企画である。この動画はアーカイブでも公開しており、第1弾の動画は公開から3週間で再生回数1,000回を超え、第2弾もわずか2日で500回を超える(11月中旬時点で約1,700回再生)など、受験生からの注目も高まっている。</p> <p>④リーダーズ制作のキャンパス紹介動画では、キャンパス全体を紹介だけでなく、多摩ならではの「学部棟」や「体育施設」をそれぞれ紹介する動画を撮影した。カメラマンが実際に歩きながら長回しで撮影することで、視聴者がツアーに参加しているような感覚を味わえる工夫をこらしている。また、多摩キャンパスの広大な自然を生かした360度VRキャンパスツアー動画も撮影し、現在編集を進めている。こうした動画は受験生に限らず、大学に来ることのできない新入生や保護者、卒業生などへの広報活動の一環として活用を検討している。</p> <p>このように、コロナ禍の状況にあってもオンラインコンテンツを活用することで、多摩キャンパスの魅力を広く全国の受験生・ステークホルダーへ発信できた。</p> <p>さらに、リーダーズはWebオープンキャンパス以外の場でも学生目線を活かした自発的な活動を展開している。例えば、3月に対面での新歓祭中止が決まった際は即座に活動紹介ビデオを制作しYouTubeで公開することで、新入生に対しオンラインで活動を周知できた。その成果として、このコロナ禍において10月に約40名もの1年生がリーダーズに新規加入している。</p> <p>また、SNS(Twitter、Instagram、LINE)で受験生向けに情報発信することで、受験生に対してWebオープンキャンパスを周知するだけでなく「多摩オープンキャンパスリーダーズ」の存在そのものに注目してもらうことができた。</p> <p>「多摩キャンパスの学生だからこそできること」を主眼においた企画を実施でき、結果として学生目線を重視した他大学にはない視点でのオープンキャンパスを実行できた点は評価に値すると。</p> <p>このように、コロナ禍の中でも学生が自分たちのできる活動を自ら検討し、実行できることは本学の目指す「実践知」を体現しており、今回の大賞に推薦できる活動であるといえる。</p>
23	ボランティアセンター学生スタッフ「チーム・オレンジ」	手作りマスク作成動画	<p>新型コロナウイルス感染症の感染拡大と共に、マスクが予防対策のために4月当時、品薄になり入手困難になったため、自作のマスクを作成するための動画を、市ヶ谷ボランティアセンターの協力の下、チーム・オレンジスタッフが作成し、法政大学のボランティアセンターHPに掲載した。マスク作成動画をHPで広く公開することによって、マスクの作成方法を世間に広く伝えることでマスク不足という社会問題に対して解決策を提案することができた。</p> <p>また、本活動は、法大生がコロナ禍で自分たちのできることを考え新型コロナウイルス感染症という社会問題に向き合い活動を行っていることを伝えられたことやコロナ禍の中での「新しい課外活動の方法」の提案ができたことについても成果の1つと考えている。</p>
24	人事部	テレワーク下における新入職員配属前研修	<p>新型コロナウイルス感染拡大の影響で、対面を前提としていた2カ月間の新入職員配属前研修を、テレワークを主体としたプログラムに変更して実施した。</p> <p>これまでの研修＝対面という概念を捨て、プログラムを修正し実施する中で、当初設定していた研修目標や効果を維持したまま研修を実施することができた。</p>
25	日本語教育プログラム(JLP)学生スタッフ	日本語教育プログラム(JLP)学生スタッフのボランティア活動	<p>主に日本語を勉強する留学生に対して日本人学生との交流の場を創出するボランティア活動。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Jラウンジの運営(授業以外で日本語を使える留学生と日本人学生の交流の場、週2～3回程度スタッフの空き時間に実施)</li> <li>・ミニイベントの実施(キャンパスツアー、お正月体験、地元の魅力紹介など)</li> </ul> <p>2020年度はZoomを使用してオンラインで活動。春学期は火曜4限、金曜2限+昼休みに実施。日本に来ることが出来ない留学生に向けて、日本人学生スタッフが自身の地元を紹介するミニイベントもオンラインで開催した。2020年秋学期時点のメンバーは5名。秋学期はJLP新入生とのオンライン交流会の実施、新メンバーの募集、Jラウンジの運営を行っている。</p>
26	学務部教育支援課若手職員	ピア・ラーニング・スペースのリニューアル	<p>2013年のSGU採択に伴い、学生が自由に使えるアクティブラーニング・スペースの拡張を目的としてBT3Fにあった旧AVライブラリーと隣接するeラウンジを全面的に改修して2015年4月に設置されたのがピア・ラーニング・スペース(以下「ピアラ」という。)である。ピアラでは大型モニターやPCの他、アクティブラーニングのためのツールが自由に利用可能であり、学生の能動的な学びへの転換を学習環境からサポートすることはもちろん、ピアネットの学生スタッフプログラム活動の拠点としても活用されています。学生の認知も進み、現在では多くの学生に利用されています(2019年度の利用者は26,869名)。</p> <p>一方で、設置当初は語学学習や映像教材視聴のために一部が残されていたキャレラデスクですが、Youtubeやスマホの普及など最近の学生の視聴環境の変化やPCを活用したグループ学習の増加などの時代の流れにより、一人用でおおかつピアラかなりのスペースを占め、圧迫感もあったキャレラデスクを撤去し、新たなスペースにリニューアルするプランが計画されました。これを任されたのが学務部教育支援課の若手職員です。ピアラ設置時には、学内的な制約もあり、かつ改修費用も大きかったため、専門の業者を入れてプランニングから施工までをお願いしましたが、今回のリニューアルはそれほどの規模ではないため、まずは若手職員たちにプランニングを任せました。</p> <p>彼らはこのプランニングにあたって、最近の図書館やラーニング・commonsが現在どのよう機能を持っているか、最近の学生の学びのスタイルはどのように変化しているのかを調査し、比較検討しました。新型コロナウイルスの感染拡大が始まった時期でもあり、直接訪問しての調査はなかなかできませんでしたが、他大学のHPや関連資料を調べたり、学習ステーションの学生スタッフにヒアリングしたりしながら検討した結果、今の学生たちが「比較的くつろぎながら仲間同士でワイワイ話し合える場所」や「リラックスして本や資料を読める場所」など欲していることが分かり、今回のリニューアルではそのようなスペースを作ろうというプランを持ちました。プランを管理職に提示した当初は、「改修にお金がかかる」「学生が寝る」など否定的な感触でしたが、他大学の調査結果や学生の声などを丁寧に説明し、理解を得ていきました。また、改修費用については、なるべく費用を抑えるため、レイアウト案はもちろん、人工芝の敷設や什器の組み立て・配置などの、什器の購入費用以外はほとんどを自分たちで行うことで、改修費用を最小限に抑えることができました。</p> <p>こうして若手職員のアイデアと努力により、法政大学としては前例のない「掘りコタツタイプ」や「寝転がって学べるタイプ」の新たな学びのスペースの誕生となりました。せっかくリニューアルしたピアラですが、現在はコロナ禍で学生が利用できない状況が続いています。学生が戻ってきた際には、新しい学びのスペースとして活用されることを願っています。</p>
27	キャリアデザイン学部	福島ESDコンソーシアム	<p>2015年度に日本ユネスコ国内委員会・文科省の「グローバル人材」育成に向けたESD推進事業(2015-2016年)に採択されて以来、坂本ゼミと地域学習支援Ⅱ(コミュニティ・メディア)を履修する学生たちを中心に、福島県内のユネスコ・スクールと海外の学校との交流支援や協働学習を行ってきた。その活動の中心には、子どもたちによる映像制作活動と学生による活動支援、映像作品を用いた国際交流活動がある。</p> <p>具体的な活動成果には、①『福島とネパールの子どもたち ビデオレターがつないだであいのキセキ』(2016年)の発行、②ドキュメンタリー映画『届け！僕たちのエール』(2018年)の公開、③ユネスコ・スクールが制作した数々のビデオレター、④法政の学生がカンボネシアの大学生と協働制作したドキュメンタリー映像などがあげられる。そのほかに、⑤年に1回の福島ESDコンソーシアムの活動報告会も行っている。これらの活動に関する研究成果として、坂本・寺崎・笹川(2019)「福島における「持続可能な開発のための教育」のための地域学習支援」がある。</p>
28	法政大学後援会、卒業生・後援会連携室、キャリアセンター、学務部、小金井事務部、多摩事務部	2020 父母懇談会代替企画	<p>(1)9月に後援会地方支部の学部3、4年生の学生父母を対象とした学生の就職活動に関するオンライン会議ツール、または電話での個別相談機会を設けた。後援会首都圏支部の学部3、4年生の学生父母を対象とした同企画を11月28日と12月5日に実施予定。</p> <p>(2)11月に学部1～4年生の学生父母を対象とした学修に関わる個別相談をオンライン会議ツール、または電話で実施予定。</p> <p>(3)「就職状況とキャリアセンターの取り組み」、「進級卒業と成績表の見方」に関する動画を製作し、後援会Webサイトにて後援会会員向けに発信した。</p> <p>(4)大学総長と15学部の学部長よりコロナ禍における大学と各学部の取り組みに関するメッセージを収めた動画を製作し、後援会Webサイトと大学Webサイトで広く情報発信した。</p>

29	文学部	文学部哲学科選択必修科目「国際哲学特講」	<p>「国際哲学特講」は、学生が、西洋に生まれた哲学の国際性を、ヨーロッパの学生との交流を通じて実地に学び、そのことを通じて、法政大学憲章がうたう「世界のどこでも生き抜く力」を獲得するきっかけを得ることを目標に、2011年に設置された。</p> <p>このような国際性の涵養は、今や大学教育が目標として掲げる定番と言ってよく、国際交流を絡めたカリキュラムの工夫が様々に行われている。しかしその際の問題は、国際交流の経験は外国語の一定の運用能力を前提とし、他方で、外国語の運用能力の獲得は国際交流の一定の経験を前提とするという、悪循環であった。</p> <p>この悪循環を断つために、「国際哲学特講」では本格的な国際交流を日本語で行うという道を取った。外国語を前提にしないで、しかし本格的な国際交流を行うという道である。そのために哲学科は、ドイツのハイデルベルク大学、フランスのストラスブール大学の日本学科と教育協力の枠組みを構築し、両学科の正規の一授業科目と「国際哲学特講」とのタイアップを実現させた(ハイデルベルク大学日本学科とは既存の一授業科目と、ストラスブール大学日本学科とはこのプログラムのために新設された一授業科目とのタイアップ)。</p> <p>具体的に見ていけば、ハイデルベルク大学と法大、ストラスブール大学と法大は、当該授業科目で、テーマと扱うテキストの共通化を図り、その上で、秋学期半期を通じてそれぞれが準備を進めて、学期末(2月)に、法大生がハイデルベルク大学を、ついでストラスブール大学を訪れ、そこで、それぞれの場所で、二大学間で、学期を締めくくる合同ゼミを行うこととした。法大生が行う独仏研修自体は1週間という短いものであるが、その間に、一コマ150分の合同ゼミを、ハイデルベルク大学で一コマ、ストラスブール大学で三コマ行っている。この合同ゼミでは、発表も討論もほぼすべて日本語で行っているが、両大学から参加するのは修士レベルの学生であって、語学の問題もまったくなく、毎回、白熱した発表と議論が取り交わされている。最近のテーマの例を挙げれば、ハイデルベルク大学との間では、「日本のLGBT問題」、「日本国憲法第9条」、「動物と社会」、またストラスブール大学との間では、「谷崎潤一郎『陰翳礼賛』」、「小泉八雲『日本の面影』」、「レヴィ=ストロース『月の裏側』」などである。なお、合同ゼミに先立って、通常授業期間中にも、互いの準備状況を、学生たちがオンラインで交換し合うことが行われている。</p> <p>1週間の研修期間中には、合同ゼミの合間をぬって、寝食を共にすることも含めて、見学や懇談で、法大生は両大学の学生たちと、密に交流を行うことになる。ゼミテーマを幅広い視野から学ぶことを越えて、また、ヨーロッパの社会・文化に直に触れることを超えて、こうした同世代のヨーロッパの学生たちとの交流が、国際性の涵養と言うことで、法大生には大きなインパクトを与えている。すなわち、わずか3-4年の勉強で、遜色なく日本語を操り、自分たち以上に日本の事を知る両大学の日本学科生は、法大生にとっては端的に驚きの対象であり、法大生からは、毎回両大学生に、「どうやって日本語を勉強したの？日本に何年いたの？」といった問いが出されることになる。それに対する両大生の答えは、「日本には行ったことがない。ただ、1年生のとき、日本語の授業は、週に16時間あった」といったものである。また、法大生の「それで、アルバイトはどうしたの？」に対する両大生の答えは、「え？アルバイトをする時間があるの？」といったことになる。こうした言葉は法大生の胸底に達するものであって、日本への帰路、彼らの口からもれるのは、「自分は大学でこれまで何をしてきたのか？」、「生まれて始めて、今、本当に外国語を勉強したいという気持ちになった」といった言葉である。そして、事実、この授業の履修者たちで、この言葉を実行に移して、交換派遣留学、あるいは卒業後の国外大学院進学に挑戦し、海外に本格的に赴くことになった者も少なくないのである。データで具体的に示せば、交換派遣留学での哲学科からの派遣学生数は、2003年～2010年の期間は6名だったのに対し、2011年～2019年の期間は13名と増えている。</p> <p>さてこのような「国際哲学特講」であるが、コロナ禍の今年度は、要の2月の海外研修の見合わせを余儀なくされている。それでもハイデルベルク大学またストラスブール大学とは、この事態をコロナ以後に予想される、教育のリモートワーク化への準備のためのものにとらえて、2月の合同ゼミをオンラインで行うこと、またそれまでの通常授業の一部も、オンラインでの共通授業としていくことで合意している。違った形ではあるが、同じく活発な学生交流が行われていくように、手立てが準備されている。</p> <p>最後に、ハイデルベルク大学、またストラスブール大学とこのような教育協力を構築していくに当たっては、哲学科も関わる国際日本学研究所(HIJAS)が長年にわたって培ってきた、アルザス欧州日本学研究所(GEEJA)を介しての、二大学日本学科との研究協力の関係が、非常な支えとなったことを申し添えたい。</p>
30	NPO論受講生有志	学びと現場をつなぐオンラインの対話の実践	<p>私たちはオンライン授業により主体的に物事を考え、意見交換の場が少なくなったと感じたことから活動を始めた。学びを深め他者と交流することを目的に、月に一度担当者を一人決め、学生や教員がテーマや議題を持ち寄り講義やワークを実施している。また学生に限らず、地域づくりの実践家や福祉施設の運営者、NPO活動家などを招き、立場や世代を越えて議論をすることができ、とても深い学びが得られる機会となっている。発表者は自身の関心分野を深掘りすることができ、参加者も関心分野が広がっている(※1)。コロナ禍で人との繋がりが希薄となっているなかで、参加者同士の繋がりができ、学びと現場を繋ぐ対話の場としてだけでなく、人と繋がる場としての役割も果たしている。</p> <p>※1参加者の一人が、難民の入管改正法についての発表を聞き、自主的に情報を収集し、他のメンバーに共有するなど関心の高まりが見られた。</p>
31	法政大学国際高等学校	「学び」とめない リモート授業の工夫と実践	<p>教員全体でオンライン・リモート授業を実践し、また質の向上を図るため、以下のような取り組みを行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教員対象のMeet機能学習会(1回)、Zoom機能学習会(1回)、リモート授業実践報告会(2回)の実施</li> <li>・教員向け実践アンケートの実施と分析(2回)</li> <li>・生徒向けアンケートの実施と分析(2回)</li> <li>・Teams内にオンライン授業相談コーナーを設け、対応に困っている教員からの質問や要請に随時対応できるようにした。</li> <li>・教育懇談会をリモートで実施し、生徒の学習状況を家庭とも共有した。</li> </ul> <p>こうした取り組みを土台に、日常的に情報交換、教科材料や技術の提供・相互共有、また実際の授業をオンライン上で紹介し合いながら、全学科でオンライン・リモート授業の工夫と実践が行われていった。</p> <p>結果、理科、体育、芸術系科目といった実験、実技、実作が必要な単元部分を除いてほぼすべての科目において、年度当初の計画通りの授業を展開させることができた(計画以上の進捗、学びの深まりを見せた科目も多い)。</p> <p>各実践内容については、枠の制限も有るため、ここではいくつか絞って紹介する。</p> <p>生物・物理・化学 オンデマンド型授業</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①前回授業の「振り返り」に担当教員がコメントしたものを確認</li> <li>②PDF形式で配信された授業用プリントをiPadにダウンロード、課題に取り組む</li> <li>③授業動画の視聴(担当教員作成 You tube配信)</li> <li>④確認課題の取り組みと提出</li> <li>⑤授業の振り返り、感想の入力(google form)</li> </ol> <p>古典B</p> <p>事前に鑑賞する作品本文の配信し次回授業までに範囲の課題に取り組み(文法解釈、口語訳)提出。担当教員は送られた取り組み内容をチェックし、解釈の誤り部分を指摘。</p> <p>オンライン授業で誤りの多い箇所を指摘し、誤りの原因、要因がどこにあるかを全体で分析。さらにMeet会議、Zoomブレイクアウトセッションを用いて作品批評と発表。</p> <p>日本の古典芸能</p> <p>取り組みの一例:2コマ連続授業2回分。「能研究」。事前に能「西行桜」の詞章を配信、課題の提示(次回までに読んであらすじをまとめておく)。第1回授業でYoutube ダイジェスト版を鑑賞し、Zoomブレイクアウトセッションを用いてグループ内で「作品の魅力と特質」を分析、googleスライドを共有して発表用スライドの作成、第2回授業で作品を完成させ、発表。全体での批評会。</p>

32	学務部教育支援課、学部事務課	<p>もしもHoppiiがなかったら～各種サービスのデジタル化による利便性向上と業務改善～</p> <p>①法政ポータルサイトHoppii (Hosei portal to pick up information)の開設  ②Web掲示板の全学導入 (物理的な掲示板の廃止)  ③Webシラバスの機能拡充 (配布用印刷シラバスの廃止等)  ④証明書オンライン申込システムの実現</p>	<p>教学系の事務における業務の共通化や一元化は、その中心を担う学務部の課題でした。この課題を解決するため、2019年に学部事務課は「業務最適化プロジェクトチーム」を立ち上げ、「窓口業務共有化」「申請書式統一とWEB掲載」「窓口業務時間」の3点の具体的な案件について、課題抽出と最適化への集中的な取り組みを行ってまいりましたが、こういった「現場の様々な取り組みやアイデアをソフト・ハード面からもサポートするしくみを構築する」という視点から、教育支援課と学部事務課教務システム担当を中心として、既存のシステムと各種サービスを見直すことにより以下の取り組みを実現しました。</p> <p>①法政ポータルサイトHoppiiの開設  学生にヒアリングすると、情報源として大学のホームページを頻繁に閲覧している学生は少数で、また、頻繁に来る「お知らせ配信」も重要な情報とそうでない情報が混在し、大事な情報を見逃す学生も多く見られました。日常的に学生生活を送る中で、まずはどこを見れば必要な情報にたどりつけるのか分かりにくいという声は以前から耳にしており、これを解消するために最初の入り口となるポータルサイトの必要性は教育開発支援機構でも早くから指摘されており、総合情報センターなどの関係部局との協議も行ってまいりましたが、予算や管理の問題などの課題が多く難航していた面もありました。しかし、ポータルサイトの必要性はますます高まっていたため、学習支援システムのリプレースを機に学務部主導で導入する方向に舵をきりました。導入の検討にあたっては、単に玄関口としてリンクをまとめるだけではなく、学生や教員への情報提供のしくみや付随する業務やシステムの機能も考慮して、より使いやすいものを目指しました。また、その過程では学部やキャンパスごとに異なる現場のニーズに応えつつも、全体のバランスを考えながら実装を考える必要があり、何度も現場と話し合いながら作り上げていきました。結果として法政ポータルサイトHoppiiの開設することができました。これにより点在していた各種システムやリンク先を集約することができ、情報を受け取る側だけでなく、発信する側も作業の煩雑さから解放され、Hoppiiを通じて大学が伝えたいメッセージを発信することが可能となりました。</p> <p>またポータルサイトを認知してもらうために重要なのがネーミングであると考え、法政〇〇やオレンジ〇〇というような安易な命名ではなく、記憶に残る名称をチームで議論しました。今ではオンライン授業の実施によりすっかりお馴染みとなり、その親しみやすい響きから「学習支援システム＝Hoppii」と勘違いされる(それ自体は新たな課題ですが)ほどHoppiiの名称は学内に浸透しています。Hoppii、学習支援システム、後述のWeb掲示板は共通のパッケージであるため、互換性のある機能を搭載したことに加えて、可能な限りの低予算にてシステムを導入するという、機能・予算両面の目標を実現するに至りました。</p> <p>②Web掲示板の全学導入  10年以上前の学生にとっては、通学して掲示板を見に行くのは当たり前前の行為でした。事務窓口も「掲示しているのだから見ていないあなたが悪い」の一言で説明が済む時代でしたが、今や様々な情報機器を通じて時間と場所を選ばずに情報収集できるのが当たり前であり、学生も当然のごとくそう考えています。大学からの情報発信も時代の要請に応えるかのようにデジタル化が進みましたが、ある学部は依然として掲示板を使い続けていたり、ある学部はHP内に独自の掲示板を設けたりと、各学部バラバラの対応であり、学生はどこを見れば必要な情報を得られるのか分からない状況でした。(特にILACを抱える市ヶ谷キャンパスではその傾向が顕著でした。)</p> <p>今回、学部掲示板のWeb掲示板化を行ったことにより、学部の情報はもちろん、キャンパスを超えた情報も手軽に知ることができるようになりました。例えばこれまで市ヶ谷学部の公開科目に関する情報を多摩キャンパスの学生が確認するには、市ヶ谷キャンパス内の当該学部掲示板を確認する必要があったものの、スマートフォン等で全学的な情報を確認することができるようになり、学生の利便性が著しく向上しました。Web掲示板導入のきっかけとなった市ヶ谷キャンパスにおける掲示板の設置スペース不足の問題もこれにより一気に解消しました。</p> <p>③Webシラバスの機能拡充と印刷の廃止  シラバスや履修の手引きは履修登録のための一定の期間にしか使わない(これ自体が問題ですが)にも関わらず、毎年、膨大な量の印刷物として、学生に配付していました。Webシラバス自体は既に導入していましたが、そのデータを印刷して冊子化し、学生に配付している学部はこの時点でもかなりありました。今年度からこの印刷を一気に廃止して、全てデジタル化しました。</p> <p>このデジタル化により学生はスマホ等でいつでもシラバスや履修の手引を閲覧できるようになり、加えてMY科目機能(自身の登録した科目等をお気に入り登録できる)等を実装したことで自分の履修登録科目の授業計画などを簡単に確認できるようになりました。また、教員や事務はもちろん大学にとってもメリットが大きいものとなりました。まずはシラバスを執筆する教員にとっては校正や印刷期間の分だけ締め切りが後倒しになりました。極端な場合、学生への公開直前まで修正することが可能となりました。事務的には校正作業や印刷会社とのやり取りの負担が無くなり、業務負担の軽減につながっています。そして、大学にとってもシラバスの第三者チェックにも十分な時間が確保でき、かつ確認と訂正の記録がシステム上の履歴として残るため、エビデンスとして十分対応できるようになったり、補助金関係でシラバスに記載する項目を急ぎ追加したりすることが容易にできるようになりました。</p> <p>今後はさらにデジタルブック化を行い、学生の見やすさを追求していくとともに、教員、職員双方にとっての負担の軽減と作業効率の改善につなげていきます。</p> <p>④証明書オンライン申込システムの実現  卒業生の証明書発行は来校または郵送による手続きでした。特に地方に住んでいる卒業生は郵送でしか申請することしかできませんでした。郵送の場合、申請書をダウンロードして必要事項を記載し、さらに身分証明書のコピーや手数料分の切手を封入するなど、手続きが煩雑であり、時期によっては発行までに1週間以上時間を要することもありました。心配になった卒業生が手続き状況の確認のために大学に電話で問い合わせをすることも日常的な光景で、窓口業務がさらに忙しくなる一因でした。海外在住の卒業生にしてみれば、たった1枚の証明書を入手するのに気の遠くなるような時間と手間がかかっていました。</p> <p>これを解消するため証明書申請のデジタル化を行いました。発行手数料や返送費等の諸手数料のクレジットカード決済が実現し、卒業生、事務窓口双方にとってメリットを享受することにつながりました。また緊急避難的にこの機能を在学生にも開放し、コロナ禍で入構が制限されている時期の在学生の証明書を発行にも対応することができました。</p> <p>以上のような取り組みは十分な検討と準備を行いながら実装までこぎつけました。今回のコロナ禍を予想していた訳ではありませんが、ロールアウトの時期が間に合ったことは幸いでした。特にHoppiiの導入による本学各種システムへのアクセスのワンストップ化は、コロナ禍で学生が入構できない状況での情報伝達に大きな役割を果たしたと自負しています。もしもHoppiiがなかったら、少なくとも学生への情報伝達のためのしくみから考えなければならぬ状態となり、今回のような速やかな対応はできなかったと思います。</p> <p>本取り組みのもうひとつの特徴は、各学部でバラバラであったしくみを統一できた点にあります。各キャンパス、各学部、部局が、独自の作業フローで運用していたため、各種手続きや申請書等がバラバラになっていました。やり方が異なれば事務的なミスも起こりやすくなります。デジタル化の推進により、業務内容の棚卸しを行い、それぞれの良い面を結集することができました。また、全学的なフローを統一することで、結果的に業務改善を前進させることにもつながりました。繰り返しになりますが、全学的な統一は、学生や教員が学部を超えた手続きをする際にも同一の手続きや申請方法で利用できるため、ユーザビリティを最適化することができました。また、適切なセキュリティ対策を施し、学外からの作業も可能にしたことから、昨今のコロナ禍におけるテレワーク等にも柔軟に対応することができたのは思わぬ成果でした。</p> <p>なお、本取り組みは学務部を中心としたものですが、これらを実現するにあたっては、各学部事務担当の理解と協力があつたことを念のため申し添えさせていただきます。</p>
----	----------------	--	--